

《見究めの“看”》と《試みの“看”》

張 佩 茹

(東京大学・院)

要旨 《見究めの“看”》と《試みの“看”》は、従来その意味的類似性が強調され、先行研究では両者は相互に置き換え可能だと論述されてきた。通時的な研究により、後者が前者に由来するという説は否定されているが、両者の意味と文法上の異同についてはいまだに検証されていない。本稿では、両者の意味が成り立つにはともに「未知の事柄」とそれを究明する手段となる動作が必要であることを指摘したうえで、品詞、《手段》としての動作・行為を表す動詞の形と意味、および平叙文における用法に関して相違点があることを明らかにした。同じ「試み」の表現ではあっても、《見究めの“看”》は「未知の事柄」を究明する側面、そして《試みの“看”》は手段となる動作を試みる側面にそれぞれ焦点が置かれており、同義の表現とは言えない。本稿は最後に両者の置き換えの可否は形式と意味の関係を示唆するものであることを証明する。

キーワード 視覚動詞 見究め 試み 語気助詞 動詞の重ね型

1. はじめに

“看”には、視覚動詞本来の「見る」という意味が希薄化し、強弱さまざまに文法化して生まれた用法がいくつか存在する。それらのうち、本稿では“你也来尝一口，看味道怎么样。”のように複文の後件に現れ、事柄の内容を「見究める」という意味を表す“看”（以下《見究めの“看”》と称す）と、“说说看”のように主に動詞の重ね型に後続し、「試みに行く」という意味を表す“看”（以下《試みの“看”》と称す）を取り上げ、両者の統語的および意味的特徴の異同を考察する。

かなり早い時期に《見究めの“看”》と《試みの“看”》の関連性に言及した論文は陸俭明 1959 である。同論文では《試みの“看”》を「試みの語気助詞」と位置づけ、さらに以下の例文を用いて、《試みの“看”》と《見究めの“看”》の意味的類似性を指摘している（陸俭明 1959: 492）。

(1) 他还没想通，你再跟他谈谈看。

(彼はまだ納得していないので、もう一度彼と話し合ってみてください。)

- (2) 他还没想通, 你再跟他谈谈, 看怎么样。

(彼はまだ納得していないので、もう一度彼と話し合っ、様子を見てください。)

(1) と (2) は意味的にほとんど変わりがないため、陆俭明 1959: 492 では、(1) の語気助詞“看”は(2)の動詞“看”が虚化した結果であると説明している。だが、蔡镜浩 1990: 75-76 は陆氏の主張を通時的な言語事実と反すると批判している。通時的考察で明らかになったのは、《試みの“看”》は複文の環境で生まれた用法ではなく、“看”の意味変化により派生したものだという点である。以下の(3)と(4)に示されるように、最初は感覚器官による探求を表す“看”に「確かめる」の意味が読み取られ、その後、感覚動詞のみならず、(5)に見られるように広く一般の動詞に後続できるようになるにつれ、「試みの語気助詞」へと文法化が一層進んだとされている。

- (3) 得暖则作速, 伤寒则作迟。数入候看, 热则去火。(北魏贾思勰《齐民要术》种桑、柘第四十五。繆啓愉校正・注积 1998: 333)

(暖気を得れば(繭を)作るのが早く、寒気に傷められると遅い。時々入って様子を見、熱すぎるようだったら火を取りのける。)¹⁾

- (4) 尝看, 若不大涩, 杳子汁至一升。(同上、作菹藏生菜法、蔡镜浩 1990: 76 による)

(嘗めてみて、もしそれほど渋くなければ、杳子汁は一升まで入れてよい。)

- (5) 汝好思量看。(姚秦弗若多罗共罗什译《十诵律》,《大正藏》23.53a、吴福祥 1995: 162 による)

(よく考えてみるがよい。)

先行研究では、《試みの“看”》の拡張プロセスに関して、ほぼ「みる>確かめる>試みる」と分析することで意見が一致している。通時的にみると、《試みの“看”》、つまり「試みの語気助詞」の“看”は複文の環境で形成された用法ではなさそうである。その一方、陆俭明 1959: 492 の論述からも明らかのように、《試みの“看”》と《見究めの“看”》との間には

直感的に関連性が見出せる。他の先行研究においても、《見究めの“看”》と《試みの“看”》を意味的に同一視するのが、両者の関連性を論じる研究の基本的な観点である（朱景松 1998: 385-386, 李珊 2003: 44-48）。

陸儉明 1959 で取り上げられた例 (1) (2) を見る限り、《見究めの“看”》と《試みの“看”》は互いに置き換えられ、類似性が高いと思われる。だが、他の用例を見ると、両者はつねに置き換え可能であるとは限らない。次の例では両者の置き換えは成立しない。

- (6) 同时, 应以更大的精力去浏览全书, 寻找还没有被改编成京剧舞台剧的“生坯子”, 看有无“一步到位”将之改编为京剧电视剧的可能性。(CCL コーパス)

(それと同時に、より精力的に全書に目を通し、まだ京劇の舞台脚本にされていない「生素地」を探し、すぐさま京劇のテレビ脚本にする可能性があるかどうかをみなければならない。)

- (6)* 同时, 应以更大的精力去浏览全书, 寻找还没有被改编成京剧舞台剧的“生坯子”看, 有无“一步到位”将之改编为京剧电视剧的可能性。

- (7) 你猜猜看, 他今年多大? (当ててみて、彼は今年何才か。)

- (7)⁷ 你猜猜, 看他今年多大?

先行研究ではこれらの用例に見られる《見究めの“看”》と《試みの“看”》の差異について全く言及せず、あたかも両者の意味機能が同等であるかのように扱っている。だが、《見究めの“看”》と《試みの“看”》の構文的な振る舞いがこのように異なる以上、両者の間には意味機能に違いがあるはずである。本稿は、《見究めの“看”》と《試みの“看”》の比較を通して、形式と意味の関連について考えてみたい。

2. 《見究めの“看”》と《試みの“看”》の異同

先行研究では、《見究めの“看”》と《試みの“看”》の異同についてほとんど触れておらず、唯一の論考は陸儉明 1959: 492 で指摘された品詞の差異、つまり《見究めの“看”》と《試みの“看”》はそれぞれ動詞と語気助詞であるという指摘に止まっている²⁾。以下、両者の共通点と相違点に着目し、《見究めの“看”》と《試みの“看”》の統語的・意味的特徴を考

察する。

2.1. 《見究めの“看”》と《試みの“看”》の共通点

先行研究のデータを見る限り、《見究めの“看”》と《試みの“看”》の前身である「確かめる」を意味する“看”の用法は魏晋南北朝まで遡れる。吳福祥 1995 ではその違いが言及されていないが、同論文のデータにこの二つの“看”の恰好の対照用例が挙げられている。

- (8) 其家有机，让比丘坐。即坐小待，复起以指内釜中，看汤热不³⁾。(東晉佛陀跋陀羅共法顯譯《摩訶僧祇律》卷第九，《大正新脩大藏經》第22卷：307-308)

(その家の座卓のところに僧を案内した。僧はすぐに座ったが、暫くすると立ち上がって指を釜の中に入れ、湯が沸いているかどうかをみた。)

- (9) 五六日后，以手内瓮中看，冷无热气，便熟矣⁴⁾。(北魏賈司總《齊民要術》笨糶并酒第六十六)

(五六日後に手を甕の中に入れてみて、冷えて熱気が無くなっていれば、熟れたということである。)

(8)の“看”には確かめたい未知の事柄(“湯熱不”)が目的語節として後続しており、つまり「指を釜に入れて、湯が沸いているかどうかを確かめる」ということであるが、(9)は“看”によって「確かめる」意図は言語化されているものの、確かめる内容は明確に言語化されていない。後の“冷无热气，便熟矣”によって、はじめて確かめる内容が温度であることが分かる。

(8)の《見究めの“看”》の用法は今日に至っても見られるが、(9)の“看”は現在では動詞の重ね型との組み合わせで使用されるのがもっとも一般的である。つまり、“试试看”や“说说看”に見られる《試みの“看”》となっている。

(8)と(9)の“看”に単なる「見る」ではなく「確かめる」という意味が読み取れる理由は、“看”が「未知の事柄」を指向しているからである。この未知の事柄は(8)のように明示的な場合もあり、(9)のように暗示的な場合もある。そして、(8)の「指を釜に入れる」動作と(9)の「手を甕に入れる」動作は「未知の事柄」を究明する手段である。両者の意味構造

は以下の (10) と (11) のように示すことができる。

(10) 手段動作, “看”+ 未知の事柄

(11) 手段動作+“看” (前後の文脈で未知の事柄が明示、もしくは暗示される)

こうしてみると、《見究めの“看”》と《試みの“看”》の運用にはともに「手段」となる動作・行為 (以下、形式的には《手段》動詞、意味的には《手段》動作と称す) と「未知の事柄」という二つの要素の存在が必須であることが分かる。このことは現代語についても言える。

(12) 你照照镜子, 看自己是不是红了眼。(王朔《我是你爸爸》)

(鏡を見てごらん、自分の目が赤くなっていないかどうかみて。)

(13) 猜猜看, 它值多少钱? (CCL コーパス)

(当ててごらん、いくらするか。)

(12) は「鏡を見る」こと、(13) は「推察する」ことを手段とし、それぞれ「未知の事柄」を究明することを意味している。前出の (8) (9) と照らし合わせると、現代中国語の《見究めの“看”》と《試みの“看”》から構成される構文は、それらを成立させる意味的要素に関して、魏晋南北朝の用例と共通している。

以上のことから、何らかの動作を手段とし、何らかの未知の事柄を究明することが、《見究めの“看”》と《試みの“看”》の共通点であると言える。

2.2. 《見究めの“看”》と《試みの“看”》の相違点

前述したように、現代中国語において《見究めの“看”》と《試みの“看”》には共通点が見られる。一方、相違点も少なからず存在する。

2.2.1. 相違点その1: “看”の品詞

まず、品詞分類からみると、《見究めの“看”》は動詞であり、《試みの“看”》は語気助詞であると考えられる。動詞である《見究めの“看”》は (12) のように裸の形で使われるほか、(14) のように重ね型で現れることもしばしばある。一方、語気助詞である《試みの“看”》は重ねることは許されない。前掲の例 (1) を書き換えた例 (15) を参照されたい。

(14) “我……打算叫人去进一步观察他一下, 看看他有什么反常的表现。”(冯骥才《啊!》)

(「私は……誰かにさらに観察してもらって、彼にどんな異常な行動があるのかをみてもらうつもりだ。」)

(15) * 他还没想通，你再跟他谈谈看看。

なお、注意すべきは、動詞である《見究めの“看”》も一定の制限を受けているという点である。まず、見究めの内容が明確でなければならないため、目的語には必ず疑問形式を含まなければならない。目的語が疑問形式でない場合、“看”には単なる「観察」の意味しか読み取れなくなり、“看”の前方の述語性成分が「何かを究明するために用いる手段」であるという読みが取りにくくなる。例(12)と(14)を書き換えた(16)と(17)を参照されたい。

(16) 你照照镜子，看看自己的眼睛。

(鏡で自分の目を見てごらん。)

(17) “我……打算叫人去进一步观察他一下，看看他的表现。”

(「私は……誰かにさらに彼を観察して、彼の行動を見てもらうつもりだ。」)

また、《見究めの“看”》は“了”“着”“过”などのアスペクト助詞と共に起しない。これらの制限から、動詞と言いながらも《見究めの“看”》は本来の視覚動詞“看”に比べ、より特化した用法であることが分かる。

2.2.2. 相違点その2：《手段》動詞の形

《手段》動詞の形についてみると、《試みの“看”》は通常“VV看”の形式で使われ、《手段》動詞に一定の制限が働く⁵⁾。さらに、陸俭明 1959: 490ですでに言及されているように、“VV看”の“V”はほとんどが単音節動詞であり、二音節の用例はきわめて少ない。つまり、《試みの“看”》の《手段》動詞は一般に単音節であり、かつ“VV”の形式で現れる。一方、《見究めの“看”》の《手段》動詞には単音節動詞の“VV”のほか、[単音節V + 数量補語]、[二音節V + 数量補語]、複雑な述語形式など、様々な形式が見られる。これらの形式は前掲の(2)(14)や以下の(18)(19)(20)からも確認できる。

(18) “……工作我再帮你跑一下，看有没有合适的文秘、资料员什么的。”(王朔〈刘慧芳〉)

(「……仕事の件はもう少しあちこちかけまわって、秘書や資料係な

ど適切なポストがあるかどうか当たってみてあげよう。』)

- (19) 现在则是先坐下来谈，看最后能谈出个什么方案。(CCL コーパス)
(今はまず落ち着いて話し合い、最終的にどんな方策が練り出せるかをみよう。)
- (20) 不停地扫描和捕捉从浩瀚宇宙传来的无线电波，并进行综合分析和鉴别，看看能否发现“外星人”的信号。(CCL コーパス)
(絶えず広大な宇宙から伝わってくる無線電波を走査しかつ捉え、さらに総合的に分析と鑑別をし、「宇宙人」の信号が見つかるかどうかをみる。)

《手段》動詞の形が主に単音節動詞の重ね型である《試みの“看”》と比較すると、《見究めの“看”》の《手段》動詞には特に決まった形式はなく、複雑な述語形式であってもよいということが、以上の用例から明らかになる。

2.2.3. 相違点その3:《手段》動詞の意味

《手段》動詞を意味の面からみると、《見究めの“看”》が《手段》動詞の語彙的意味を選ばないのに対し、《試みの“看”》は「未知の事柄を究明する」ということを意味する動詞と結びつく傾向がきわめて強い。その傾向を検証するために、“比”“猜”“尝”“算”といった探求義が含意される単音節の動詞について、“VV 看”と“VV, 看……”の二つの形式をCCLコーパスで検索してみたところ⁶⁾、表1のような検索結果が得られた⁷⁾。

表1 CCL コーパスにおける“VV 看”と“VV, 看……”の用例数

	比	猜	尝	算
VV 看	22 例	62 例	7 例	21 例
VV, 看……	2 例	なし	なし	なし

この表を見ると、これらの動詞のほとんどが“VV 看”の形で使われることが分かる。つまり、探求義が内包される動詞“比”“猜”“尝”“算”の重ね型は、《見究めの“看”》よりも《試みの“看”》との結びつきが強いということである。

なぜ“比”“猜”“尝”“算”の重ね型の直後に《試みの“看”》が後続する傾向が強いのだろうか。前述したように、通時的にみると、“看”は感覚器官による探求を表すことで、「確かめる」の意味を帯びようになったとされている。“看”は元来感覚器官による働きを表す動詞と共起するものであった（前掲の例(3)(4)(9)を参照）。その後、この“看”が五感以外の動詞と結合するようになったことで動詞的性質が弱化し、「試み」の助詞へと品詞を変化させたとされる。現代に至っては、“VV看”の形式で定着している⁸⁾。“VV看”はすでにそれ自身「試み」を表す形式として構造化されているということであり、したがって動詞自身に「未知の事柄を究明する」という含意がなくても、“VV看”の形式に入ると、「試み」の意味が付加されるということになる。例えば、“坐”には本来、探求義は含まれないが、“坐坐看”にすると「試み」の意味が生まれる。だが、「試み」を表す形式“VV看”と最も相性の良い動詞はやはり探求義が含意される動詞である。“比比看”“猜猜看”“算算看”などは探求義と「試み」の文法形式との組み合わせであるがゆえに、使用頻度が高く、全体で一つのまとまった表現になっていると考えられる。

注目すべきは、探求義を含意する単音節動詞の中で、“试”がもっとも《試みの“看”》との結合度が高いという事実である。“试”は「试す」を意味するが、“比”“猜”“尝”“算”と同じように疑問文を目的語にとることができる。“你算算一共多少钱。”（全部でいくらするか、数えてみて。）の“算”に探求義が読み取れるように、“你试试这件衣服合身不合身。”

（体にぴったり合うかどうか試してみて。）からも“试”に備わっている探求義が窺える。CCLコーパスにおいて、“试试看”の例は560例得られた。これは先の“比”“猜”“尝”“算”を遥かに上回る数字である⁹⁾。“试试看”の使用頻度が圧倒的に高いのは、“试”が「試み」そのものを意味することがその一因となっているほかに、「試み」を表現するとき、“试”には代動詞的用法が見られるということがもう一つの原因だと考えられる。以下の(21)で検証したい。

(21) 只要它是人造的, 就应该能修, 试试看看吧! (CCLコーパス)

(人工のものであるかぎり、修理は可能なはずだから、やってみてごらん!)

(21)においては、“修”という動詞が直前に出ているので、“试试看”には“修修看”が含意されている。“试试看”はこのように、前方の動詞と「試み」を包括して表現することができるために、使用頻度が高い。

以上の考察で《試みの“看”》と探求義が含意される単音節の《手段》動詞との強い結びつきが確認できたが、《見究めの“看”》の《手段》動詞にはそれほどの強い傾向が見られない。

2.2.4. 相違点その4：平叙文における制限

これまでに検証してきた用例の多くが命令文であることから分かるように、《見究めの“看”》と《試みの“看”》は一般的に会話で使われる。また、命令文のほかに、“我来试试看。”（私がやってみよう。）のような意志表明の用例も存在する。

吴福祥 1995: 162によると、《試みの“看”》は平叙文で使われることもあるが、その場合、“VV看”が「意志性の動詞」に後続するか、兼語文の第二動詞でなくてはならない、という制限がある。兼語文の構造を木村 2000: 20 に倣って“XV₁YV₂”で記号化すると、“VV看”はV₂の位置を占める、ということになる。以下の(22)と(23)は吴福祥 1995の用例であるが、(22)から“想”を取った(22)’や“开开看”だけを述語にした(24)はいずれも非文になってしまうことに注意されたい。

(22) 听说炒股票有赚头，小王也想试试看。

（株は儲かると聞き、王さんもやってみたくなくなった。）

(22)’ * 听说炒股票有赚头，小王也试试看。（「やってみた」の意味で）

(23) 小李说他会开车，我让他开开看。

（李さんは運転できると言っていたので、彼に運転させてみた。）

(24) 这款车很不错。*小李昨天开开看，他说非常好开呢！（「運転してみた」の意味で）

なぜ平叙文で使われるとき、《試みの“看”》はこのような制限を受けるのだろうか。本稿では、それは《試みの“看”》の使用が未然の《手段》動作および「未知の事柄」と深く関わっているからであると考ええる。

(25) 你说的这个方法很不错，我来试试看。

（今、言っているその方法はよさそうだね。やってみよう。）

(26) 你说的那个方法很不错，*我昨天试试看，非常有效。

(27) 你说的那个方法很不错，我昨天试了，非常有效。

(あなたが言ってくれたその方法はなかなかいいね。昨日やってみたら、非常に効果があった。)

以上の三例から分かることは、発話の時点で《手段》動作が未然で、かつその動作によって究明される事柄が存在すれば、《試みの“看”》が使えるのに対し、すでに《手段》動作が実現済みであり、その結果も確認済みである場合には、《試みの“看”》は使えないということである。なお、“看”と「未然の《手段》動作」や「未知の事柄」との共起関係については、方言研究でもすでに報告されている¹⁰⁾。

平叙文においても、“VV看”には「未然の《手段》動作」と「未知の事柄」が成立条件となっているため、《試みの“看”》が吳福祥 1995: 162 で言及された制限を受けるのだと考えられる。まず、“想”や“打算”といった意志性を表す動詞に後続することによって、“VV看”全体が未然の事態となる。また、“让”“叫”など兼語文の第一動詞に後続するのも、それによって“VV看”が未実現という読みができるからである。すでに荒川 1977: 57 で指摘され、さらに木村 2000: 21-22 で特徴づけられている通り、“ XV_1YV_2 ”の V_2 は通常、目的性のものであり、まだ実現していない動作・行為である。兼語文における V_2 は未然性を成立条件とする“VV看”がもっとも入りやすい位置だと言える。

中国語において命令文の間接化が“叫(让)”を用いる「使役」構文(広く言えば兼語文)によって担われていることは荒川 1977: 55 の議論で明らかにされている。下の表2にまとめたように、“VV看”の用法に関して、命令文や意志表明の文における動作の未然性は、平叙文であっても、意志性の動詞や兼語文の第一動詞が“VV看”の前方にあることによって保証されている。

表2 《試みの“看”》の会話文と平叙文における用法

	会話文	平叙文
意志表明	小王说：“我来试试看”。	小王想试试看。
命令	小王跟小李说：“你去找找看”。	小王让小李去找找看。

上述のように、《試みの“看”》は平叙文においても“VV看”の未然性が保たれる必要があるため、いくつかの制限を受けている。一方、《見究めの“看”》は、平叙文において実現済みの《手段》動作を表すことも可能である。下記の(28)(29)で確認されたい。

(28) 他站起来，伸了个懒腰，像个一无所获的小特务不死心地环顾四周，看还有哪儿遗漏未搜的。(王朔《我是你爸爸》)

(彼は立ち上がり、腰を伸ばし、何も情報を手に入れていない下端のスパイのように、しつこく周囲をぐるりと見渡し、どこかに漏れがないか、まだ探していないところがないかをみている。)

(29) 徐宝芬耍了个小聪明，10头苗猪放8头圈里，另两头送亲戚家，看究竟哪种养法长得快。(CCL コーパス)

(徐宝芬は知恵を働かせて、10頭の子豚のうち、8頭を柵に入れて、残りの2頭を親戚の家に届け、どちらの育て方のほうが早いかをみてることにした。)

なお、(28)(29)で使われる《見究めの“看”》は、命令文のそれよりも「未知の事柄を探求し続ける」ことが強調されている。なぜなら、《手段》動作が未然の場合、それによって究明される事柄は当然未知の境地にあるが、《手段》動作が実現すれば、通常は、未知の事柄も究明されたということになり、表現の焦点はその究明の結果に移る。だが、《手段》動作が実現済みでありながら、究明しようとした事柄が未知のままであるならば、それはまだ探求し続けているということに他ならない。そのことは、(28)の“还”や(29)の“究竟”などの副詞が使われていることから窺える。

本節の論述からも明らかなように、《見究めの“看”》と《試みの“看”》との相違点は、従来指摘されてきた品詞の違いのほか、《手段》動詞の形と意味、そして平叙文における制限などが挙げられる。次節では《見究めの“看”》と《試みの“看”》にみる形式と意味の関連性について考察する。

3. 《見究めの“看”》と《試みの“看”》にみる形式と意味の関連性

3.1. 焦点化について

《見究めの“看”》と《試みの“看”》の違いは、中古漢語の用例である(8)の“以指内釜中，看汤热不”と(9)の“以手内瓮中看”からすでに見出せると考えられる。前者の“看”には「未知の事柄」が目的語節として後続し、「未知の事柄」が“看”と直接的な意味関係を結ぶため、《見究めの“看”》は探求の内容に焦点を置いていると考えられる。一方、後者の“看”は《手段》動詞に直結し、「未知の事柄」の存在は必ずしも明示的ではないため、《試みの“看”》は《手段》動詞そのものに焦点をあて、その動作が何らかの未知の事柄を解明するために行う動作である、という意味を付与する。

3.2. 形式上の距離と意味上の距離

前節では、《見究めの“看”》と《試みの“看”》の違いを明らかにしたが、《手段》動詞が単音節であるものに限って言えば、確かに陸俭明 1959: 492と朱景松 1998: 385で言及されているように、“你再跟他谈谈看”と“你再跟他谈谈，看怎么样”、そして“你念念看，拗口不拗口”と“你念念，看拗口不拗口”（いずれも「言いにくいかどうか、音読してみて」を意味する）はそれぞれ置き換え可能な表現である。だが、《手段》動詞の性質によっては、置き換えが制限される場合もある。“猜”がその一例である。

朱景松 1998: 386は、以下の(30)と(31)では、《手段》動詞“猜”の意味が異なっていると解釈する。

(30) 你猜猜看，有几个。（当ててみて、何個あるか。）

(31) 你猜猜，看猜得着猜不着。（当ててみて、さて当たるかな？）

朱氏の説明によれば、(30)では“猜猜”の直接の結果は“有几个”に対する回答である。一方、(31)においては、“猜猜”の直接の結果は“猜不着猜得着”に対する回答ではなく、この“猜猜”はある認識を得るための手段であると説明している。朱景松 1998: 385は、“VV，看 VP 不 VP”と“VV 看，VP 不 VP”（“VP 不 VP”を疑問形式の代表として）は基本的に同等の表現だと見なしており、上に述べた(30)と(31)の“猜猜”に関する意味の違いは、“猜”それ自身の語彙的意味の差に起因するものと考え

ている。だが、もしも朱氏の言うように、“VV, 看 VP 不 VP”と“VV 看, VP 不 VP”が全く同義であるとするなら、次の(30)’と(31)’が不自然な文になるという事実はどのように説明できるのだろうか。

(30)’ 你猜猜, 看有几个。

(31)’ 你猜猜看, 猜得着猜不着。

本稿は、(30)と(31)の意味上の違いはやはり構造の形式における差異に起因すると考える。いま議論を簡潔に進めるために、下の(32)(33)で、《見究めの“看”》と《試みの“看”》を含む文の意味構造をもう一度提示する。なお、「未知の事柄」が直後に現れる場合における両者の違いを比較するために、《試みの“看”》の文に関しては、「未知の事柄」を明示的なものに限定する。

(32) 《見究めの“看”》の文：「《手段》動作，“看”+未知の事柄」

(33) 《試みの“看”》の文：「《手段》動作+“看”，未知の事柄」

(32)から分かるように、《見究めの“看”》の文では、《手段》動作と「“看”+未知の事柄」の間にコンマ（音声的にはポーズ）があり、「《手段》動作の実行」と「未知の事柄の究明」は二つの段階として分けることができる。二つの段階に分けられるがゆえに、「《手段》動作の実行」と「未知の事柄の究明」が意味的にやや離れることもある。(31)の「你猜猜，看猜得着猜不着。」はその一例である。この文において「未知の事柄」である“猜得着猜不着”は“猜猜”の直接の疑問の対象ではない。直接の疑問対象が仮に“有几个”だとすれば、“你猜猜，看猜得着猜不着。”で求めていることは、まずは“猜”を実行して、その結果“有几个”への解答が出る（第一段階）。次に実際の正解と照らし合わせて、“猜得着”か“猜不着”かを見究める（“看”）ことになる（第二段階）。言い換えると、《見究めの“看”》の文では、「《手段》動作の実行」が直接「未知の事柄の究明」になっていなくても構わない。「《手段》動作」と「“看”+未知の事柄」の形式上の距離は、意味の上にも反映されていると言えよう。

一方、《試みの“看”》の場合、「手段動作+“看”」の形式で表現されているのは、「《手段》動作の実行」が「未知の事柄の究明」につながっているということである。(33)のように、その後「未知の事柄」が現れる場

合、通常その「未知の事柄」は「《手段》動作の実行」によって直接究明される事柄である。(30)の「你猜猜看, 有几个。」はその一例で、この文において“有几个”は“猜”の直接の疑問の対象である。(33)の構造では、多くの場合「未知の事柄」が「《手段》動作」の直接の対象であるがゆえに、両者の間に意味的に密接な関係が見られるのである。

このように形式を切り口にしてみると、(30)'と(31)'の不自然さの理由も説明がつく。まず、(30)'において“猜猜”という行為の実現はほかならぬ“有几个”への回答であるにもかかわらず、ここで《見究めの“看”》を使うと、「《手段》動作の実行」と「未知の事柄の究明」を二つの段階に分けることになり、“猜猜”と“有几个”の意味上の緊密なつながりを取って切り離してしまうことになる。さらにもう一つ考えられる原因は、“猜”は、そもそも何かの答えを得るために用いる《手段》としての行為には適さない行為だということである。つまり、“猜”という行為はそれ自身が《見究める》行為であり、それを《手段》として「“有几个”を見究める」ということは、「《見究める》行為を《手段》として《見究める》行為を行う」と述べているに等しく、明らかにトートロジーに陥っている。ゆえに、“猜”を「未知の事柄の究明」に意味の焦点が置かれている《見究めの“看”》の文で使うのは不適切になるのである。

次に、(31)'の問題点は「未知の事柄」の内容の唐突さにあると考えられる。《試みの“看”》の後にコンマでつなげられている「未知の事柄」は通常、《手段》動作の実行によって直接究明できるはずの事柄である。ところが、(31)'では「未知の事柄」が“猜得着猜不着”であり、これは“猜猜”の直接の結果として究明されるはずの答えではない。そのままに意味を取ると、「当ててみて、当たるかどうかを」というような理解しにくい内容になってしまう。ゆえに(31)'は自然な文として許容されない。

以上の議論から、《見究めの“看”》と《試みの“看”》は、やはり構造の違いを反映して、意味機能を異にする形式であることが分かる。

3.3. 形式と意味の相関性

形式が類似する構造は、文脈によってはほぼ同義と理解され、置き換え可能と思われることがどの言語にもある。Langacker 1987: 39-40の指摘によれば、(34)と(35)は一見置き換え可能な構文のように見えるが、実は

それぞれの表現の重点が異なっている。

(34) He sent a letter to Susan. (X VERB Y to Z)

(彼はスーザンに手紙を送った。)

(35) He sent Susan a letter. (X VERB Z Y)

(34) には“to”があるため、手紙がスーザンに届くまでの道のりに表現の重点があり、(35) では“a letter”が“Susan”の後に置かれているため、表現の重点は、結果としてスーザンがその手紙を所有しているという状態を述べることにある。このように(34)と(35)の構文の間には表現の重点に違いがあるため、必ずしもつねに置き換えられるとは限らない。例えば、(34)と同じ構文の“The shortstop threw a ball to the fence.”(遊撃手は柵に向かってボールを投げた。)は適切な文であるが、(35)と同じ構文の“*The shortstop threw the fence a ball.”は非文である。なぜなら、柵は無生物であり、ボールを所有することができないからである。

Langacker の指摘が端的に示すように、たとえ形式に類似性があっても、異なる形式である以上は意味機能が異なると考えるのが妥当である。《見究めの“看”》と《試みの“看”》についても同様のことが言える。両者はともに「試み」の表現として置き換えが可能な用例が存在するが、置き換えられない用例も数多くある。従来の研究では、《試みの“看”》の用法を解釈するために《見究めの“看”》を取り上げているため、両者の共通点だけが論じられてきた。しかし、本稿の考察から明らかのように、実際には《試みの“看”》は単音節動詞の“VV 看”という形式に拘束されているため、多くの制限を受けている。一方、複文の後件に使われる《見究めの“看”》は《手段》動詞に複雑な述語形式も入り得るので、表現の幅が広い。また、《見究めの“看”》を用いる際、「《手段》動作の実行」と「未知の事柄の究明」は二つの段階に分かれているため、「未知の事柄の究明」は意味的に「《手段》動作の実行」の直接の結果でなくてもよい。これらの違いは構造に由来すると考えられる。

4. まとめ

本稿では、従来看過されがちだった《見究めの“看”》と《試みの“看”》の異同に着目し、それぞれの統語的・意味的特徴を考察した結果、次のよ

うなことが明らかになった。

統語的には、《試みの“看”》のほうが多くの制限を受けており、《手段》動詞の形式がほとんど単音節動詞の重ね型に限られるほか、平叙文においては前方に他の動詞の存在が必須である。一方、複文の後件に使われる《見究めの“看”》は、疑問形式を含む文が後続することとアスペクト助詞と共起しないこと以外、特に制限は受けない。

また、意味的には《試みの“看”》は探求義の動詞との結びつきが強く、特定の動詞と頻繁に共起する現象が見られる。《見究めの“看”》の《手段》動詞にはそのような傾向は見られない。

「未知の事柄」が後続する場合における両者の置き換えの可否については、本稿では形式の違いの観点から分析を試み、「《手段》動作の実行」と「未知の事柄の究明」が二つの段階に分けられるかどうかで、《見究めの“看”》と《試みの“看”》が使い分けられていると結論付けた。形式と意味の切り離せない関係がここからも見て取れる。

なお、現代中国語の「試み」の表現に関して、動詞の重ね型“VV”自身も「試み」の意味を表現しようとされている。また、北京方言では、“试试”には動詞に「試み」の意味を付与する助詞としての用法が確定しつつあるという指摘もある（張伯江・方梅 1996: 148-151）。なお、興味深いことに、動詞の用法から「試み」の助詞へ文法化する過程において、北京方言の“试试”と《試みの“看”》は異なる拡張方向を見せている。前述したように、《試みの“看”》は探求義が含まれる動詞（感覚器官による働き）との共起が文法化の始まりだったが、“试试”の場合は、最初は探求義が読み取れない動詞（句）と共起しており、「試み」の助詞としての用法は“尝尝试试”のように探求義の動詞との共起が可能になることによって確立したといえよう。“VV”と「試み」の関係、そして《試みの“看”》と“试试”の比較は今後の課題とする。

〈注〉

- 1) この訳は西山・熊代（1984）を参照した。
- 2) 陸俭明氏の論考を引用する李珊2003: 44-48では「語氣助詞」の「語氣」を取り除き、《見究めの“看”》と《試みの“看”》をそれぞれ動詞と助詞であると説明するが、基本的に陸俭明氏と同じ見解を示している。

- 3) 吳福祥 1995: 162 では「其家有机，让比丘坐：“即坐小待”。……」のように、“即坐小待”に引用符をつけているが、前後の文の意味を考えると、引用符は余分なものと思われるので、本稿では引用符を削除した。
- 4) この例文を最初に取り上げた論文は、蔡鏡浩 1990 である。蔡鏡浩 1990 をはじめ、この用例を引くとき“五六日后，以手内瓮中，看冷无热气，便熟矣”のように、“看”と確かめた結果である“冷无热气”を結合させているが、《齐民要术》のほかの“看”の用例に照らし合わせると、「確かめる」を意味する“看”の直後に確かめた結果を並べるのは適切ではないと思われる。《齐民要术》において、文形式の目的語が“看”に後続する用法は下記の①と②である。「確かめる」を意味する“看”は③のように、“看”を使う時点ではその結果がまだ不明であるほうが、「確かめる」という意味にかなない、のちの“看”の「試みに行う」という用法へもつながる。
- ①「～を見たら、このように行動する」という意味の用法。
 用例：“看有裂处，更泥封。”（笨鞠并酒第六十六，繆啓愉校正・注釈 1998: 513）
 （裂け目が見つかったら、さらに泥封する。）
- ②「ある状況に基づいて判断し、行動をとる」という意味の用法。
 用例：“看酿多少，皆平分米作三分，一分一炊”（笨鞠并酒第六十六，同上 p.511）
 （醸造の量に応じて、米を三等分にし、一つで一炊分とする）
- ③「確かめる」の意味の用法。
 用例：“尝看，若不大涩，柿子汁至一升”（=前掲の例（4））
- なお、1998 年出版の《齊民要術校釋》（繆啓愉校正・注釈，514 頁）では“五六日后，以手内瓮中，看冷无热气，便熟矣”となっているが、1958 年出版の《齊民要術今釋》（石聲漢校正・注釈，第三分冊 491 頁）では“五六日后，以手内瓮中看：冷，无热气，便熟矣”となっており、本稿の分析と一致している。
- 5) 現代中国語の用例を見ると、“VV 看”の数が圧倒的に多く、《試みの“看”》の《手段》動詞の形は“VV”に代表されると言ってもよい。吳福祥 1995: 161 によれば、ほかに“V-V 看”や“VC 看”（“你给我量一下看”や“先做几天看”など）の形式もある。ただ、現代中国語において“V-V 看”や“VC 看”がまったく存在しないとは言えないまでも、これらはやや古い形式で、出現頻度が極めて低い。張伯江・方梅 1996: 142 でまとめられている「試み形式の推移」の表からも、“VC 看”は現代中国語において生産性の低い形式であるという判断が読み取れる。
- 6) 2008 年 2 月 19 日現在のデータ。
- 7) “VV 看”の項目には、“VV 看”の後に目的語が続かない用例のみを数えた。例えば、“你算算看。”“你算算看吧。”“我不算算看不行。”などは“VV 看”の用例として数えるが、“你算算看一共多少钱。”の場合、その“看”は語気助詞ではないため、統計の対象から外した。
- 8) 「試み」に関する形式の推移については張伯江・方梅 1996: 142-145 が詳しい。

- 9) “试试看”のほか、“想想看”と“说说看”も索出例がかなり多く、それぞれ 681 例と 199 例であった。特に 681 例という“想想看”の索出例は“试试看”の 560 例を上回る数字となっている。“想”や“说”には強い探求義があるとは考えにくいだが、なぜ“想想看”と“说说看”の使用頻度がそれほど高いのだろうか。それには、“试试看”と違い、語用的な要因が強く働いていると考えられる。《試みの“看”》は主に命令文で使われている（吴福祥 1995: 161）。つまり、“想想看”と“说说看”の多用は、会話でよく用いられる“你想”“你说”の影響だと思われる。“想想看”を例にとると、“想想看，有没有什么好办法？”（何かよい方法がないか、考えてみて。）のような「試み」の表現がある一方で、“想想看，这一切老花农哪里懂得。”（冯骥才《雕花烟斗》）（考えてごらん、このすべてが花農家のじいさんにどうして理解できようか。）のような反語文も少なくない。会話における“想”や“说”の特殊な用法については刘 1986 を参照されたい。
- 10) 語気助詞の“看”ではなく、“看”の補文標識（complementizer）としての用法に関する記述ではあるが、许惠玲・马诗帆 2007: 68 は、閩南語の潮州方言において“说”と“看”にはともに「探求義の動詞+“说”/“看”+疑問形式の節」の用法があり、両者はアスペクトにおいて異なり、“说”は已然の事柄に使われるのに対し、“看”は未然の事柄に使われると指摘している。また、鄭良偉 1997: 115 では台湾閩南語において前方の動詞が既知を表す場合、“看”は使えないのに対し、探求義を表す動詞なら“看”が使えると記述している。

〈参考文献〉

- 荒川清秀 1977. 「中国語における「命令」の間接化について」, 『中国語研究』 16 : 41-64 頁。復刻版『中国語研究』下巻〈第十二号~第二十三号〉, 1988年白帝社。
- 木村英樹 2000. 「中国語ヴォイスの構造化とカテゴリ化」, 『中国語学』 247 : 19-39 頁。
- 蔡镜浩 1990. 「重谈语助词“看”的起源」, 『中国语文』 1990年第1期 : 75-76 頁。
- 李 珊 2003. 『动词重叠式研究』。北京 : 语文出版社。
- 刘月华 1986. 「对话中“说”“想”“看”的一种特殊用法」, 『中国语文』 1986年第3期 : 168-172 頁。
- 陆俭明 1959. 「现代汉语中一个新的语助词“看”」, 『中国语文』 1959年10月号 : 490-492 頁。
- 吴福祥 1995. 「尝试态助词“看”的历史考察」, 『语言研究』 1995年第2期 : 161-166 頁。
- 许惠玲・马诗帆 2007. 「从动词到子句结构标记 : 潮州方言和台湾闽南话“说”和“看”的虚化过程」, 『中国語文研究』 2007年第1期 : 61-71 頁。
- 张伯江・方梅 1996. 『汉语功能语法研究』。南昌 : 江西教育出版社。

鄭良偉編著 1997. 『台、華語的接觸與同義語的互動』。台北：遠流出版事業股份有限公司。

朱景松 1998. 「动词重叠式的语法意义」, 『中国语文』 1998 年第 5 期: 378-386 页。

Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar Vol. I*. Stanford University Press.

〈引用文献〉

『齊民要術：校訂譯註』 第四版 1984 西山武一・熊代幸雄訳註。東京：アジア経済出版会。

『大正新脩大藏經』 第 22 卷。東京：大正新脩大藏經刊行會。大正十五年発行。昭和三十三年再刊印刷。

『齊民要術校釋』 第二版 1998 繆啟愉校釋。北京：中國農業出版社。

『齊民要術今釋』 第三分冊 1958 石聲漢校釋。上海：科學出版社。

〈例文出典〉

北京大学汉语语言学研究中心 CCL 现代汉语语料库

http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/index.jsp?dir=xiandai

〈啊！〉〈雕花烟斗〉：冯骥才《冯骥才中短篇小说选》北京：中国青年出版社，1981 年。

〈刘慧芳〉〈我是你爸爸〉：王朔《王朔文集 3 矫情卷》北京：华艺出版社，1992 年。

〈付記〉

本稿は日本中国語学会第 57 回全国大会における口頭発表をもとに加筆・修正したものである。執筆にあたり、熱心なご指導をくださった先生方に感謝申し上げます。

“探究义‘看’”及“尝试义‘看’”

张佩茹

(东京大学·院)

提要 以往关于“探究义‘看’”及“尝试义‘看’”的研究主要关注二者在语义上近似这一点,认为它们可以相互置换。虽然历时研究已指出“尝试义‘看’”并非“探究义‘看’”虚化之后的结果,但是对于二者在语义及语法上的异同,目前还缺乏较为全面的分析。本文指出二者的相似点在于语义上都需要一个未知事项及能够作为手段来探究此未知事项的动作,而二者的不同点在于词性、作为“手段”的动词的形式及语义、使用于陈述句中的限制等等。虽同样表示“尝试”,“探究义‘看’”的语义焦点在欲探究的未知事项上,而“尝试义‘看’”则是在作为手段的动作上,二者并非完全相同。影响二者可否互相置换的条件能够反映出形式及语义的关系。

关键词 视觉动词 探究 尝试 语气助词 动词重叠